

プロジェクトを支えた皆さんにインタビューしました



コーディネーター 児玉真伍

町田さんは蒲郡の魅力を存分に引き出してくれる

この堤防は蒲郡の風景として定着しており、市民にとって思い入れのある場所なので、いいものにしたいと思っていました。30年先まで残すことを考えたときに、同世代のアーティストにお願いしたい気持ちもありましたし、蒲郡の魅力である「自然」をモチーフにしているところもぴったりだなと思って。それで町田さんを選びました。

縦と横の時間軸がうまく重なった

もちろん最初は公募の絵と調和するか不安もありましたが、町田さんがテーマにしている「蒲郡の自然」という縦の時間軸と、皆さんが描く「蒲郡の1年間」という横の時間軸がうまく重なり、結果的にすごく深みのあるものになったなと感じています。外から来たアーティストが蒲郡についていろいろ調べて描いたからこそ、市民の方にも「蒲郡にこんなところがあるんだね」って新しい発見を楽しんでもらいたいですね。

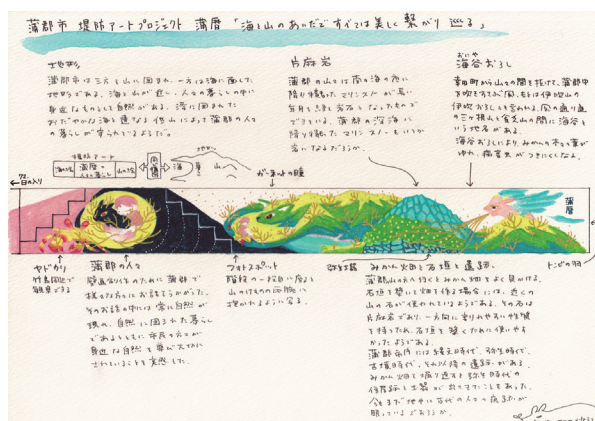
ゲストアーティスト 町田 紗記

自然に守られて生きるまちの姿を描きたかった

壁画の左に海、右に山をテーマにした私の作品があり、その真ん中に参加者の皆さんが描いた絵があります。これは蒲郡の地形を表していて、海と山が人々の暮らしを守っているという構図です。絵を描くにあたり、魚市場のセリを見たり、五井山に登ったり、いろいろな人に話を聞いたりしました。その中で、市民が自然に愛情を注いで暮らしているという共通点が見えてきて、それを表現したいと思ったんです。蒲郡の風の名前を調べていたら、通りすがりのおばあちゃんが「海谷（おにや）おろし」だと教えてくれて、その風も絵の大切な要素になりました。

このまちには壁画を描ける土壤がある

七十二候をテーマにこんなに多くの人が絵を描いたということにまず驚きました。都会では季節を実感しづらいけど、蒲郡の人たちは身近な自然をちゃんと見て暮らしているんだなと感じました。これだけ多くの人が関わって、1つの大きな壁画を描き上げられるまちって、そうそうないと思います。



市ホームページで解説が見られます